

京都丹波 まな Viva!

令和4年3月22日 No.53

京都府南丹教育局発行

「京都丹波 まな Viva!」は、学校と先生を応援する南丹教育局の学びのニュースです。

「なんたん学びモデル推進校」の実践研究

「なんたん学びモデル推進校」では、推進校が各校・園の現状分析の上、「学力向上」に係る課題解決に向けた研究テーマを掲げ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて主体的に研究実践を進められました。

各校の実践研究から、校内研究を推進するための組織的な取組や授業改善の工夫など、大切にしたいポイントをまとめましたので紹介します。

〈1年次〉	亀岡市立大成中学校	南丹市立殿田小学校
	京丹波町立瑞穂小学校	京丹波町立蒲生野中学校
〈2年次〉	亀岡市立幼稚園	亀岡市立安詳小学校
	南丹市立園部小学校	京丹波町立竹野小学校
		南丹市立八木中学校ブロック

・社会の激しい変化の中でも何ができるかを**主体的に判断**できること
 ・多様な人々と**協働**していくことができること
 ・新たな価値を創造していくとともに新たな**問題の発見・解決**につなげていくことができるようになること

授業の中で身に付けられていますか？



令和2年度研究指定校の報告から令和3年度の実践へ

	成果と課題	
授業改善	①「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業構想 ②多様な学習形態を取り入れた授業 ③ICT タブレット端末の利活用 ④傾聴の姿勢 ⑤振り返り	主体性
評価	⑥新学習指導要領に沿った評価 ⑦ルーブリック シラバス	家庭学習
家庭学習	⑧授業とつなぐ家庭学習	
学力向上	⑨各テスト結果、分析の活用	全校体制
連携	⑩校種間連携 ⑪つながりを意識した教育	
研究体制	⑫校内授業研究会 ⑬研究推進だより（教師用通信） ⑭全校体制で研究を推進していく方策	

新学習指導要領に小・中がそろった令和3年度となりました。コロナ禍による学習活動の制限などがある中で、「主体的・対話的で深い学びのある授業」の実現に向けて、多くの学校では、児童生徒に確かな学力を育むためにどうするか試行錯誤しながら、実践が進められました。

「主体的に判断する力」「多様な人々と協働する力」「新たな価値を創造する力」など、これからの社会で求められる能力を授業を通じて育成していくためには、教師自身の「学びをとめない」ことが大切です。推進校の連携会議では、それぞれの学校で取り組まれた成果と課題を交流し合い、今後の方向性について考えました。

キーワード「学びの本質を捉える」

単元構想の工夫

身に付けたい力（捉えさせたい学びの本質）を明確にした単元指導計画

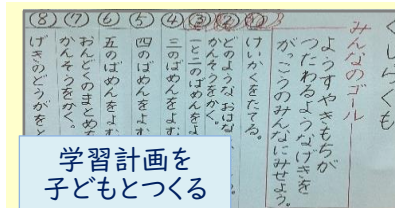
- 年間指導計画、学習の系統性、指導事項、児童の実態などから、単元のゴールの姿をイメージし、そこに向かうための単元構想を練る。
- どのような目標に向かって、どのような学習を行うのか、児童生徒が自覚して、主体的に学習に臨む授業（学習活動・場）を設定する。
- 「教える」から「学び取らせる」への授業改善。

単元の学びを生かす

- 身に付けた力を用いて思考を深めるなど、活用する場面を設定する。

授業とつなぐ家庭学習

- 予習を効果的にさせることで、授業のポイントが焦点化される。
- 学び方への着目、学びへの関心を高める環境で、学びを自己調整しようとする力を育む。



学習計画を子どもとつくる

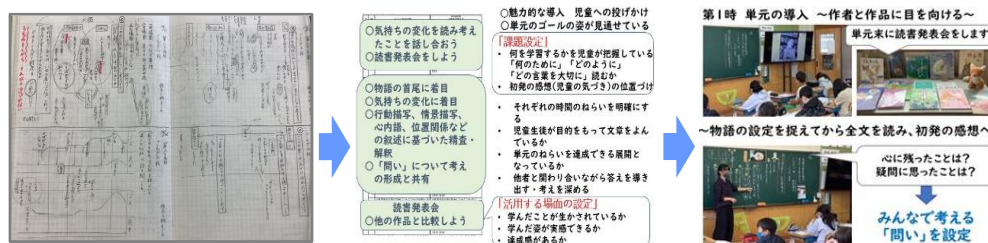
主体的に課題に向き合う



予習の活用で思考場面を活性化



活用場面



教材研究

単元計画

導入場面

「心が動く」授業の展開

対話の質を向上 ～「伝えたい」「聞きたい」という思いを育む～

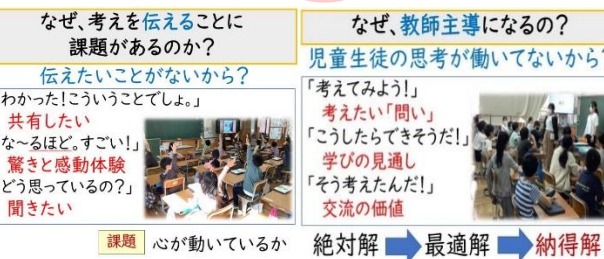
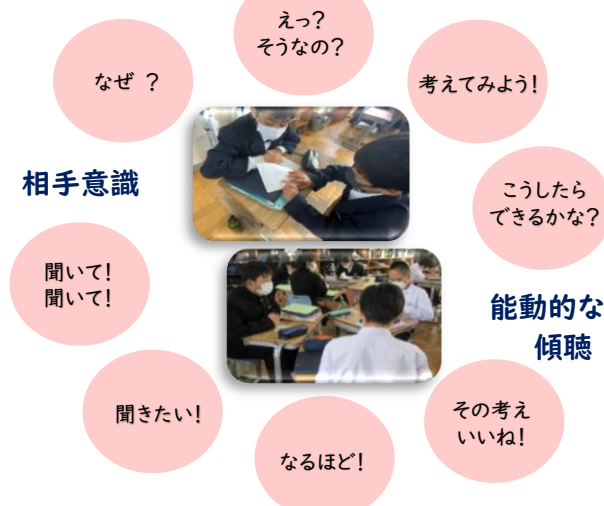
- 言語活動のねらいを持ち、効果的に取り入れる。
- 交流することに価値を見出す、納得解を得る対話になっているか振り返る。
- 教師のファシリテーターとしての学習展開を創造する。
- 自分の考えや気付きを発信しやすい授業づくりを行う。（傾聴の姿勢の育成、学び合える集団づくり、継続的指導）

多様な学習形態の工夫

- 対話を活性化し、思考を深めるためのツールを活用する。
- 教科担任制や交換授業などを行い、教職員全員で子どもたちの多様な考えを見取る。
- 教科等横断的な学習、課題解決型（PBL）の学習展開。

ICT・タブレット端末の利活用

- 単元・授業のねらいに合った効果的な利活用。
- 自分に合う学び方が選択できる授業展開。
- 様々な表現の手法を学び、自分の目的にあった表現の仕方を選択できる力を養う。（自己表現能力の育成）



キーワード2「指導と評価の一体化」

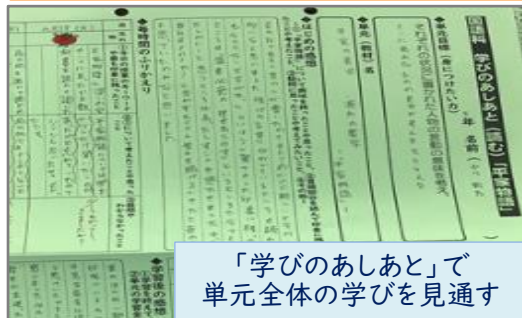
振り返りの充実

深い学びと振り返りの充実 ～どんな振り返りを書かせたいのか～

- 本時の振り返りだけでなく、単元や内容のまとまりとしての振り返りも有効。
- 内容のまとまりとして自己の学びをしっかりと振り返らせたいときは、時間の確保が必要。
- 単元を通した振り返りシートの工夫で、学びの深まりや自己の変容(成長)を自覚できるようになる。

分析とつなげて

- 学力テストの分析や授業評価アンケートをもとにした授業改善。



「学びのあしあと」で
単元全体の学びを見通す



振り返しをする場面を 1 (Hop・Step・Jump) 設定

確かな振り返り → 深い学びにつながる

- **本時のめあてに対しての「振り返り」** **達成感**
 「今日はこんなことができた、分かるようになった」
 ・ ね点を明確にする
 ・ 考えを深めるキーワードを入れるなど短い言葉で簡潔にまとめる
到達度
- **学び合うことのように目を向けた「振り返り」**
 「○○の意見を聞いて〜」
 「○○と考えた方がいいね〜」
 ・ 学び合いの充実
 ・ 考えを整理し、構造化された反省
一体感 **メタ認知**
- **既習学習・他教科・生活との関連付け、一般化**
- **自己の受容への気付き** **自己有用感** **期待感**

学習評価

児童生徒理解としての評価

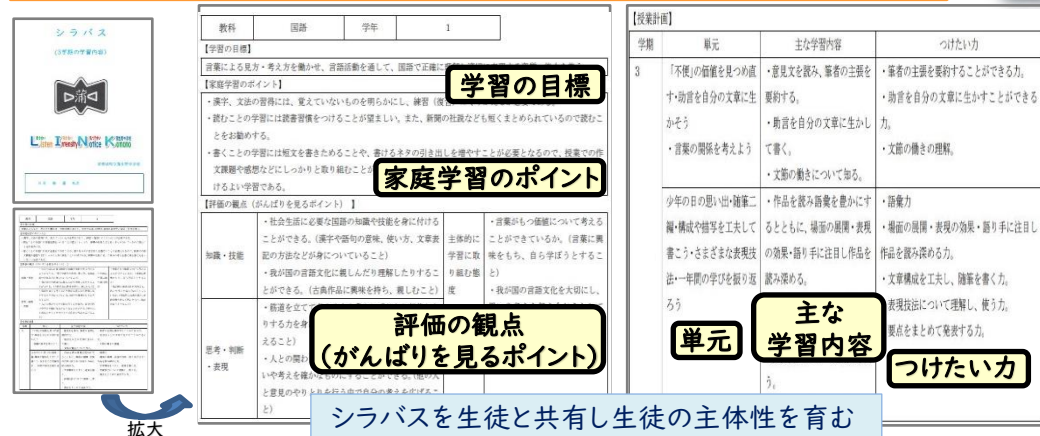
- 学習評価は、児童生徒に「どんな力が身に付いたか」という学習状況を評価するもの。
- 単元を見通し、「記録に残す評価」や「指導に生かす評価」の計画を立てることが、単元で育てたい資質・能力を明確にすることにつながる。
- 児童生徒の学びを振り返り、学習や指導の改善に生かしていくというサイクルをより重要視する。

評価を焦点化

- 観点別学習状況の評価「記録に残す評価」については、毎回の授業ではなく原則として単元や題材などの内容や時間のまとまりごとに、それぞれの実現状況を把握できる段階で行うなど、場面を精選することが重要。

評価を児童生徒と共有

- シラバスが主体的な学びにつながるものであるかを検証、見直しを行う。



擴大

シラバスを生徒と共有し生徒の主体性を育む

「まな Viva!No.49」を参照

キーワード3「学びをつなぐ・ひろげる」

研究体制

研究が積み上がる体制づくり

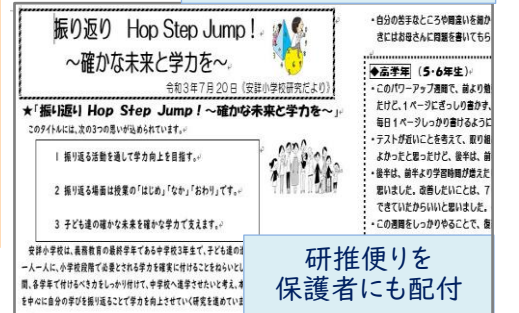
- 年度始めに研究の構造を整える。(R-PDCA サイクル、外部講師、ワーキンググループ等)また、目指す児童生徒の姿や目指す授業の在り方についての方向性を明確にする。
- 全教職員で学び合いができるように、授業研究会の持ち方を工夫する。
〈推進校の工夫例〉
 - ・レジュメに前回の校内研の課題を書き、授業を見る視点を揃える。
 - ・実際にあったエピソードで語ることを重要視することで、より効果的な学習の環境や支援の方向性を定めていく。
 - ・授業にいかす視点や方向性を全員で共有し、授業とつなげる。
 - ・「事前前研」、模擬授業等を行う。
- 日常的に授業を参観できるような校内システムをつくる。
- 授業が終わった後に研推便りを作成し配付する。
- 交換授業、教科担任制を計画的に取り組み、効果を検証する。



自分ごととして考え
本気の議論



ICT を効果的に用いて 全員の声で進める



研推便りを
保護者にも配付

公開・発表

実践の交流と波及

- 幼・小・中が同じベクトルで研究を進めることにより、研究の成果が向上。また、家庭や地域への発信も効果的。
○互いの研究会に参加し、授業づくり・取組方法について協議を深める。



八木中学校ブロックにおける、道徳教育の推進
研究主題「地域とともに歩む道徳教育」

亀岡市立幼稚園の公開保育 幼児教育の在り方を検証

幼児教育の成果

幼児教育の成果をつなぐ ～非認知能力の育成へ～

- 遊びのすべてが学び。遊びから何を学んでいるか見取ることが大切。その遊びを偶然から必然へするために、見取りと支援、しかけと環境設定を行う。
- 幼児教育における「見方・考え方」や環境設定を、小・中学校につなぐ。
- 幼児期の終わりまでに育ってほしい「10の姿」を共有する。



「10の姿」を通して
子どもたちを見る

子どものよさや可能性、考え、
行動の意図等今まで見えてい
なかった様々なことが見えてくる。

推進校だけでなく全ての学校・園において、自校の研究推進に日々ご努力いただいたことと思います。その先生方のご尽力が子どもたちの未来を拓き、未来を担うことに繋がっています。「授業が楽しい!」「学ぶことが楽しい!」と子どもたちも先生方も思えるような研究を、次年度も推進していきましょう。

推進校だけでなく全ての学校・園において、自校の研究推進に日々ご努力いただいたことと思います。その先生方のご尽力が子どもたちの未来を拓き、未来を担うことに繋がっています。「授業が楽しい!」「学ぶことが楽しい!」と子どもたちも先生方も思えるような研究を、次年度も推進していきましょう。